

氏名(本籍)	藤原健志(神奈川県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博甲第6570号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	青年期における聴くスキルの研究

主査	筑波大学教授	博士(心理学)	濱口佳和
副査	筑波大学講師	博士(学術)	望月聡
副査	筑波大学助教	博士(心理学)	大谷保和
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	佐藤有耕

論文の内容の要旨

(目的)

本研究では、児童青年を中心に人の話を聴くことに対する社会的ニーズが高まっていることを背景として、社会的スキルの一部として、人の話を聴くスキルに注目し、(a) 社会的スキルにおける聴くスキルの理論的検討ならびに、聴くスキルの定義と構成概念の整理を行い、(b) 聴くスキルを測定する質問紙尺度を開発するとともに、(c) 聴くスキルの背景要因と (d) 聴くスキルと心理・社会的適応との関連を検討することを下位目標として定め、以下の研究方法論を用いた検討が行われた。

(対象と方法)

上記の目的を達するため、本研究では目的 (a) の理論的検討部分を除き、高校生を中心とした一般サンプルの青年計 5,000 名を対象に、複数回の質問紙調査を実施した。いずれの調査においても、調査用紙は学級担任によって配布ならびに回収が行われた。

(結果)

第Ⅱ部では、聴くスキル尺度の作成が行われた。このうち、第3章(研究1)では、自由記述調査による回答を基に、聴くスキルの認知的側面ならびに行動的側面を測定する尺度が作成された。聴く認知スキル尺度は4因子15項目、聴く行動スキル尺度は5因子18項目によって構成された。第4章(研究2)では両尺度の項目内容を一部変更した改訂版聴くスキル尺度が作成され、その信頼性と妥当性が検討された。

第Ⅲ部では、聴くスキルを規定する要因が検討された。第5章(研究3)では、個人内要因として親和動機、自己愛性パーソナリティ傾向、個人志向性・社会志向性を取り上げ、特に親和傾向と社会志向性が聴くスキルと正の関連を有することが明らかとなった。第6章(研究4)では、環境要因として保護者の養育態度と仲間からの役割期待を取り上げ、養育態度に比べて仲間からの役割期待の方が、聴くスキルに対してより大きな関連を示すことなどが明らかになった。

第Ⅳ部では、聴くスキルと心理社会的適応の関連が検討された。第7章(研究5)では内在化問題として状態不安ならびに抑うつとの関連が、第8章(研究6)では外在化問題として攻撃行動との関連が検討された。聴くスキルの低い群はそれ以外の群に比べ不安得点や抑うつ得点が高いこと、聴くスキルの行動的側面が一

部の攻撃行動と関連していることが明らかとなった。第9章（研究7・研究8）では学校生活満足度と疎外感（研究7）、友人関係における満足度と知覚されたソーシャル・サポートならびにストレス反応（研究8）との関連が検討され、聴くスキルは学校生活満足度を媒介として対人的疎外感と負の関連を有すること、春時点の適応感や秋時点の聴くスキルを統制しても、春時点の聴くスキルが秋時点の適応感と正の関連を有することが示された。

第V部（研究9）では、聴くスキルを生起させる要因として親和動機を、心理社会的適応として学校生活満足度を取り上げ、聴くスキルとの関連を、主張性スキルを含めたパス解析モデルを用いて検討した。多母集団同時分析の結果、主張性スキルを統制しても、主に親和傾向が聴く認知スキルを高め、聴く認知スキルが被侵害感を低減することが示された。

（考察）

第4章（研究2）で作成された改訂版聴くスキル尺度は、尺度全体ならびに下位尺度のいずれにおいても、十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。第Ⅲ部の結果は、聴くスキルを規定する個人内要因として、親和傾向や社会志向性などの、他者とかかわろうとする動機や態度が強い者ほど聴くスキルの獲得・実行が促進されることが示されたと言える。また、仲間からの役割期待の方が保護者の要因より強く働いていることも、青年期特有の特徴を表していると言える。第Ⅳ部では、聴くスキルは内在化問題傾向、攻撃行動、学校生活満足感、友人関係満足感などとの関連があること、約半年後の適応感を予測することが明らかとなり、高校生の精神的健康や問題行動の少なさと関連性が示された。本研究の結果は、聴くスキルの独自性と有効性が示すものであろう。

審 査 の 結 果 の 要 旨

聴くスキルを認知と行動に分けて測定することのメリットを十分に示すことと、聞くスキルが比較的短期間で訓練によって獲得しえるものであることを示すこと、尺度の合計点の高さによって規定されている聴くスキルの高い人が、聴くスキルを多面的に細分化して見た時に、実際どのような状態にあるのかを明らかにするなど、いくつかの課題を残しつつも、高校生の聴くスキルの個人差を測定する信頼性と妥当性を備えた尺度を開発し、その規定要因や適応との関連を実証的に示した点で、先駆的な意義のある研究と評価できる。

平成25年1月16日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。